

## 茶華道で「もてなしの文化」を世界へ発信

芦屋市茶華道協会会長・小笠原 秀道



毎年、日本の学生や留学生たちを対象とした礼儀作法等講習会や、主に子どもたちを対象とした体験教室を開催するなど、とりわけ若い

明けておめでとございます。芦屋市茶華道協会は、昨春秋、芦屋市民文化賞という、たいへん栄誉ある賞をいただきました。茶華道は、「もてなしの文化」です。また、美への感受性を養うための鍛錬場でもあると思えます。心を謙虚にし、いのちある花と向かい合い、美しいものを美しいと感じ、そしてそれを忘れないことが大切です。当協会は、市内でお茶・お華を教えるおられる先生がたを正会員、そのお弟子さんたちを準会員とし、これまで茶華道を通して日本文化の継承に努めてきました。私は平成十九年に芦屋市茶華道協会会長に就任いたしました。当協会は昨年で創立六十周年を迎えています。その間には、

形式にこだわることにはありませんが、それでも日常生活に欠けないお茶は、心の



●小笠原流煎茶道「体験教室」(瑞峰庵)

世代に日本文化に親しんでいただけような試みも続けてきました。今後とも、体験教室などを開催し、より多くのかたに「もてなしの文化」に親しんでいただけるよう、活動を続けていきたいと思えます。さて、お茶には抹茶と煎茶があり、茶葉には玉露・煎茶・香煎茶に大別され、木の育て方、茶の製法等それぞれ異なります。煎茶道は、江戸時代末から明治初めにかけて大流行を経て現在に至ったのですが、いかにおいしいお茶を味わうかという、ごく自然な願いを、誰にでも容易にかつ自由に楽しんでいただくのが、煎茶道だということができると思えます。

煎茶道に、「和敬清閑」という言葉があります。これは煎茶道の根本理念として説かれるもので、和を悟り、尊敬と信頼を深め、常に公平で、誠意に満ちた清い心と、肉体的にも精神的にもゆとりをもつということを目指しています。一朝夕に得られる心境ではありませんが、煎茶道を通じてこのような合理的精神

あつてはなりません。茶を点てる人の所作と、周りの静かな環境、そして茶室の構成や使用する茶具の形状・色彩等の調和があるとき、客は真の楽しさ・美しさを知り、おいしい茶を喫することができると言えます。こうした調和の雰囲気こそが、茶の奥義ともいえます。単においしいお茶を入れるだけでなく、人と人との心の交わりを大切にすることで、心の温もりを一煎に託し、美しい日本の文化を全世界の人々に伝えたいと願っています。また、文化の伝承を形だけのものではなく、先人たちの心を伝えたいと思えます。そして、茶道精神が茶室だけではなく、日常生活に生きる精神であることを目指したいと考えています。

を体得し、それが社会の向上発展のためにいささかなりとも寄与することができればと念じています。毎年一月にはそこで「初釜」が開かれ、お茶に接する機会もあると思います。堅苦しいと敬遠することなく、ぜひともそんな機会には、美しい日本文化を創造してきた先人たちの心を思いつつ、おいしくお茶を味わっていただければと思います。



●夏休みの子どもたちを対象に、市民センターで実施した小笠原流煎茶道「体験教室」

### ●小笠原 秀道(おがさわら しゅうどう)氏

芦屋市茶華道協会会長。同協会は、平成23年度の芦屋市民文化賞受賞。ご自身は、(財)小笠原流煎茶道理事長・(社)全日本煎茶道連盟理事ほかを歴任され、本市を拠点として、小笠原流煎茶道の保存と伝承を図るとともに、煎茶道文化の普及活動に尽力されています。

平成3年に「財団法人煎茶道小笠原流瑞峰庵(東山町)を設立し、その活動の場は、全国各地の教室のほか、公共団体の事業への積極的な参加、さらにアメリカ・中国・カナダ・イギリスなどの諸外国で催された親善茶会・交流茶会・献茶式などにも広がりを持ち、平成21年にはロサンゼルス総領事館公邸で行なわれた「天皇誕生祝賀献茶式」において、茶道の家元として海外で初めて献茶を行いました。平成22年、旭日双光章を受章。著書に、「美しい礼儀作法とマナー(主婦の友社)」

## スポーツの“ちから”と温故知新

スポーツジャーナリスト・賀川 浩



スポーツが好きで、書くことが好きで、新聞社の運動部記者として仕事を始めて六十年。自らが旧制・神戸一中時代から熱中したフットボール(サッカー)の世界での盛況ふりを知り、その広さ、高さを眺めて、伝える楽しさに酔いながら、日本のサッカーが質量ともにそのトップレベルに並ぶことを願ってきた。すばらしい先輩や仲間にも恵まれてグラウンドに足を運び、ときにはイベント開催にも関わりながら、いつの間にか米寿に近づいていた。

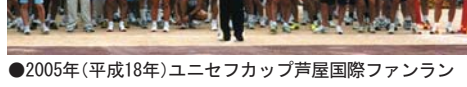
天賦的なサッカー選手・岩谷俊夫くんと故人の父君が精道小学校の校長先生で、阪神電鉄芦屋駅山側の自宅をよく訪れ、松林の中で練習の相談をした。彼のドリブルの技は、松林での遊びからだとも知った。四十何年かの中に、その南に生まれたシーサイドタウンで、芦屋国際ファンランという、阪神間で初めての市街地での市民ランニング大会の創設に関わった。



●1994年(平成6年)ワールドカップ・アメリカ大会決勝パサデナのスタジアムで。左端が賀川浩

昭和五十七年に大阪国際女子マラソンがスタートし大成功したこともあった。こうしたイベントの設計・運営にワールドクラスの能力を持つ、Y氏がレースディレクターを務めたことも大きく、芦屋市や市体協・陸協をはじめシーサイドタウン自治会の強力な応援を得て、昭和五十九年十一月の第一回大会を実施成功した。特別協賛社のダイエーには感謝の言葉も無い。

このとき私は、すべての人の力を結集できるスポーツの力を改めて知った。このランニングイベントは阪神大震災での中断はあっても、四月のサクラ期に定着して芦屋の大イベントになり、日本八ムさんの特別協賛もあって、多くのランナーに最も親しまれる大会として続いている。このときの市



●2005年(平成18年)ユニセフカップ芦屋国際ファンラン

長・松永精一郎さんは私の神戸一中の大先輩だが、その弟・隆四郎さんも私が一年生のときの五年生、即ち昭和十二年全国中等学校選手権(現・高校選手権)優勝チームのキャプテンだった。日本のサッカーを盛んにし、レベルアップするためには、少年への浸透が大切、キメ細かく大会の運営や指導をするためには、県協会よりも市協会がやる方がいい。と兵庫県のサッカー人たちが提唱したとき、率先して実行したのが、当時の芦屋市サッカー協会理事長であった松永隆四郎さんだった。

その芦屋市サッカー協会は近く五十周年を迎える。西田俊一会長は、自分たちの足跡を振り返ることで、その足場を固め、次の五十年に向かつて前進してゆこうと、五十年史の出版などの計画を立てておられると聞く。自らの身近な歴史を学び、将来に向かおうという芦屋市のサッカー協会の姿勢は、全国の仲間にも共鳴を呼ぶに違いない。

### ●賀川 浩(かがわ ひろし)氏

大正13年、神戸市生まれ。神戸一中、神戸経済大(現・神戸大)大阪クラブなどでサッカー選手。全国大会優勝、東西対抗出場、天皇杯準優勝などの経験をもつ。昭和27年から現在まで60年間スポーツ記者、サッカーワールドカップ9回・欧州選手権5回をはじめ、内外の試合を取材し、ベレから香川真司に至る多くのプレーヤーをインタビューしてきました。

スポーツ・イベントでも、大阪国際女子マラソンやユニセフカップ芦屋国際ファンランの創設に関わり、釜本邦茂引退試合の大成功も見ました。現在は、執筆活動とともに主宰するウェブサイト「日本サッカーアーカイブ」の充実を注いでいます。平成22年「日本サッカー殿堂」入り。著書に『釜本邦茂ストライカーの戦術と技術』(講談社)その他『サッカー日本代表 世界への挑戦』(新紀元社)を監修・執筆しています。

新春メッセージ ●今回は、昨秋市民文化賞を受賞された賀川さんと茶華道協会会長・小笠原さんのお二人に、新年のメッセージをいただきました。